

## アメリカ英語のいわゆる「そり舌音」再考

南 太 一 郎

### The So-called American English “Retroflex” Reconsidered

Taichiro MINAMI

#### ABSTRACT

It is generally assumed that there are three “retroflex” sounds or allophones in the pronunciation of American English, i. e., the consonant [ɾ] and the vowels [ɜ̥, ə̥]. They are usually classified separately. In addition, it is commonly held that the retroflex has two different manners of articulation: one, raising and curling back the tip of the tongue toward the back of the alveolar ridge or the hard palate, and the other, bunching and retracting the body of the tongue. Both of these manners include lip-rounding as well.

This paper asserts that the so-called “retroflex” consonant and vowels in American pronunciation are not in reality retroflex as that term suggests the sounds to be. In fact, a single phoneme unit /ɹ/ with the two phonetic realizations, [ɹ̠, ɹ̠̥], has the backward retraction of the body of the tongue as the major, obligatory factor, together with a) upward bunching of the tongue, b) touching and pressing of the sides of the tongue against the second bicuspid and molars, c) constrictions of the mouth cavity both at the lower pharynx and at either the back of the hard palate or the front of the soft palate, and d) lip-rounding.

The second part of the paper examines pronunciation manuals published both in Japan and abroad, based on the discussion of the first part. The descriptions and explanations of the sound /ɹ/ and its pronunciation in most of the manuals are quite inadequate, and, therefore, need to be improved.

Teachers of English in Japan (especially Japanese teachers) are urged to cultivate their own kinaesthetic introspection or feedback ability, as suggested by J. C. Catford. Mere reliance on books and/or tape materials recorded by native speakers does not ease or solve the difficulty in teaching this “chameleon” sound to Japanese students.

#### 0. は じ め に

物は、しばしばその実体の同一性にもかかわらず、見方・解釈の仕方によって別の物として分類されることがある。英語の音声において端的にそれが現れるのがアメリカ英語の音声(以下略して米音)の、いわゆる「そり舌[反転]音」(retroflex)であって、一般にこの音は子音 (read), 母音 (girl, better), あるいは二重母音の要素 (bear) などに分けて扱われている(従って、半母音とか半子音とかと呼ぶ学者

もある)。そして、それぞれ子音の場合には [r], 母音、二重母音の場合には [ɜ, ə] (あるいは [ə:r, ər]) と区別して表記されるのが通例である。

しかし、確かにそうすることには便宜的理由があるにしても、純音声学的に言えば妥当性は少ないと言わざるを得ない。この音を子音と母音に区別して分類することには、音声的と言うよりは音韻的な、この音が音節の中で果たす役割という機能面の考慮が多分に働いていて、ある音を母・子両音に分けるやり方が不備であるということは夙に Pike がその著 *Phonetics* (1943) の中で指摘しているところである (cf. 杵矢 58)。Mayer (1985<sup>7</sup>, 107) の呼ぶこの音の「カメレオン性」とでも言い得る特徴は、上記の機能上、表記上の問題と深い関係があるが、それは見方、解釈の仕方の問題であって、この音の音声学的な実体とは必ずしも一致しないように思われる。

又、この米音のそり舌音は、従来から日本人学習者にとっては習得の難しい音とされているが、このことは、日本語に /r-l/ の対立がなく、その為ラ行音と混同され易いという点から説明されることが多い。しかし、日本人にとってこの音が難しいとされるのは、実はそれだけによるものではなく、教本・指導書類の記述・説明の仕方にも原因があるようである。端的に言うと、この音を指導する場合、その名称でもある「そり舌」という点にのみ片寄った発音方法が示され指導されていて、或いは却ってこれが不正確に習得されてラ行音との区別がうまくいかない原因になっているのかもしれない。

以下、本稿においては、この米音のいわゆるそり舌音に関してなされているこれまでの記述・分類を再検討すると共に筆者自らの観察も交えながら、この「ぬえ」的音の本質的記述・分類はいかにあるべきか、ということを検討していきたいと思う。又、それと同時に、そのあるべき記述・分類に基づいて、一般の英語発音教本や指導書の記述・説明のどういう点が問題であり、効果的発音指導としてはどうあるべきなのか、ということにも言及する予定である。

## 1. そり舌音の記述・分類

### 1. 1. 通時[歴史]の変遷

歴史的には、そり舌音とされる音が生じてくるのはずっと下った時代であって、これは一連の弱化現象として把握することができるが、元来は綴りにも現れている様に *r* のある位置ではすべて子音としての音価で発音されていた。この場合の音は古英語 (OE), 中英語 (ME) において、いわゆる「巻舌[連震]」(roll, trill) の [r] で、舌尖が歯茎で(あるいは歯茎に対して)連続して震えるようにして出される音(別名歯茎顫動音)であった、というのが定説である。Gimson (1980<sup>3</sup>, 209) によれば、OE, ME では巻舌の [r] と共に舌尖が一回だけ歯茎をはたく様にして発音される「はたき音」(tap, flapped) の [ɾ] もあったとされるが、むしろ Thomas (1958, 86) の言う様に [ɾ] は [r] を発音する際のエネルギーが弱まったもので、[ɾ] の方が少し時代が下がると考えた方が良いかもしれない。Brunner (1973, 314) によると、16世紀には中間音と末尾音において [ɾ] が使われなくなるとされるが、これが Thomas や Gimson の言う「摩擦音」(fricative) の [ɹ] に弱化したことを指しているかどうかは明確ではない。しかし、いずれにしても、弱化における次の段階で生じたのがこの摩擦音 [ɹ] であるのは間違いないが、Gimson によると17世紀までには [ɹ, r] は母音の前の位置でのみ用いられ、摩擦の有無にかかわらず [ɹ] が語末[音節末]や子音の前で用いられていたようである (209)。

イギリス英語に関しては、ME の [ɛ], [ɪ], [ʊ] (この音から円唇性が消失して [ʌ] となる) が語末の /r/ の前、又は /r/+子音の前で中舌化を起し、16世紀にはロンドン地域で、また17世紀の後期にはその他の地域でも一般化して [əɪ] となった。そして、18世紀 (Thomas は19世紀初期とする) に

は母音の後の位置で [ɹ] が消失して [ɜ:] が生じた、と説明される (Gimson 125)。

しかし、米音では、[ɹ] が消失する前に、母音の後の位置の [ɹ] は直前の母音と融合し、いわゆる母音に r 音色が付与された音になったが、この場合の [ɹ] は摩擦音が弱化した非摩擦音 (non-fricative) [現在いわゆる無摩擦継続音あるいは漸近[接近]音 (frictionless continuant, approximant)] であったと考えられる (cf. Brunner 314; Gimson 209)。

従って、米音における母音の後の (post-vocalic) [ɹ] は、綴りの r を忠実に発音するもの (もちろん、前の母音と融合した音質で) として、英音で [ɹ] が消失したのよりも以前の発音を留めている、と言うことができる。そして、一般に母音として [ɜ, ə] と表記される音も、元来は子音 [ɹ] の影響で生じて来たものである、ということになるのである。

## 1. 2. 音声学書の記述の検討<sup>1)</sup>

米音のそり舌音を最も端的に特徴付けているものとして一般に指摘されるのは、言うまでもなく、そり舌[反転、後屈]性 (retroflexion) ということである。今この特徴の定義を引いてみると、次のようになるであろう。

前舌を起こし、反りかえらせて、舌の裏面を歯茎…に向ける構方の音である。…米音では母音にこれがあり *earn, burr, church* の中に含む音は [ə] (又は ə') と記されるが、この (') は一種の反転音なのである。 (『音聲學大辞典』 672)

…それ[そり舌という術語]は、舌尖が硬口蓋の前部、言い換えれば、歯茎のすぐ後ろの方向へそり返る時作られる音を指している。 (Crystal 265)<sup>2)</sup>

つまり、そり舌と言う場合の調音器官 (articulator) は舌尖[舌先] (tongue tip) で、これが反転するというのが「そり舌」という語で示されていることになる。しかし、これもよく指摘されている様に、米音のそり舌音には、もう一つの調音方法が認められていて、その場合には実際に舌尖が反転していても retroflex と一括して扱われていることが多い。これがいわゆる「隆起の r」 (bunched 'r') と呼ばれるものである。<sup>3)</sup> この bunching の意味していることは、「舌体 (body of tongue) が、ある音を発音する間、高く緊張した状態に保たれる舌の位置を指す」 (Crystal 39)<sup>4)</sup> ということである、言い換えれば、舌全体が口蓋へ向かって盛り上がる[隆起する]ということになる。つまり、この場合には舌尖自体は調音上さして重要な役割は果たしていないということになるが、上述の様に、普通にはこの調音方法も retroflex という語に含意されて用いられている (この事が実は問題なのであるが、それについては後述)。

米音に関する記述で代表的なものはやはり Kenyon (1950<sup>10)</sup>) である。以下詳しく彼の記述を見てみようと思うが、まず指摘すべきことは、Kenyon は子音 (又わたり音とも呼ぶ) [ɹ] (= [ɹ]) と母音 [ɜ (= ɜ), ə] の二つに分けて考えていることである。ただし、以下に見る様にその説明方法は互換的である。

[ɹ]

…(筆者の発音においては) 舌の動きが始まる母音の位置は *hurt hət* における母音の位置であり、その母音は舌先が硬口蓋に向かってそる、つまりそり舌[反転]を伴う単一母音である。…そり舌の程度は様々で、ある場合には r の舌は歯茎の方向へ単に上げられるだけだが、他の場

合には、舌は後方に引かれ、両側が収縮するだけである。しかし、いずれの場合でも、聴いた時の響きは驚く程似ている。もし舌が *rate* における *r* の開始の位置に定められ、声が発せられれば、*hurt* *hɜt* における *ɜ* の母音が作られる。(161)<sup>5)</sup>

[ɜ]

…筆者の発音においては、この音は *err* という語全体(の発音)と同一である。舌先は口の前方から上昇し、口蓋に向かって多少とも後向きにそり返る。ただし、舌先が口蓋に接触することはない。母音 *ɜ* を発音している間中、舌は *rate* の子音 *r* を発音し始める時の瞬間の構えと同じ位置に保たれた状態である。これが「反転」あるいは「そり舌」母音を作るのである。一般米語 (General American) には他の発音のタイプも生じるが、その場合にはそり舌の程度はわずかであるか、さもなければそり舌の代わりに舌が盛り上がり同時に後ろに収縮する。しかし、その場合でも、母音はやはり「*r* 音色付与」されていて、それが *r* 音の印象を与えるのである。(196)<sup>6)</sup>

[ə]

これは、GA の無強勢でそり舌か、あるいは *r* 音色付与された母音で、*better* *betə*, *perceive* *pə'siv* において *er* の綴りで表わされているものである。同様の舌の位置であるので、強勢のあるそり母音 *ɜ* に対応しているが、それよりも短く[緊張の少ない]弛んだ音である。(199)<sup>7)</sup>

母音 [ɜ] の他の発音方法について述べたくだりでは、舌の隆起と後方収縮について指摘しているのはさすがに鋭い観察であるが、以上から窺えることは、Kenyon がこの音を母・子両音に分けるのは音韻的考慮があるからで、音声としては全く同じものだと考えていることである(ただし、[ə] に関しては強勢の有無や音長等を考慮している。しかし、その場合でもこの音自体の調音方法は同じであると判断しているように思われる)。更に、Kenyon はこの音を retroflex としているが、母・子両音共二つの調音方法があることを記している。つまり、厳密に言えば、retroflex の中に bunched をも含めて考えているのである。

次に Thomas (1956<sup>2</sup>, 94) を見てみると、[ɜ] の説明として Kenyon 同様やはり二通りの調音方法を認めているが、舌の中央部をかなり高く上昇させて発音するもの(いわゆる bunched)を「中舌[中央]音の [r] のように」(like the central [r])と言い、舌の中央部を上昇させると同時に舌尖を上昇させて発音するものを「舌尖の [r] のように」(like the tongue-tip [r])と述べている。Thomas の場合にも、一応 [ɜ] は中開・中舌張り母音(mid central tense vowel)に [r] 音色が付与されたものと考えてはいるが、実質的には子音 [r](=[ɹ])と同じと判断している、と考えて良さそうである。

Bronstein (1960, 176) は米音の母音 [ɜ] を成節的(syllabic)/r/ と言い、結局 [ɜ]=[ɹ] という判断をしている。更に、子音の /r/ をわたり音(glide)と分類しているが、やはり母・子両音共に、多少の表現の差はあっても、二通りの調音方法を紹介しているのは Kenyon, Thomas と同様である。<sup>8)</sup> ただし、Bronstein で注目すべき記述は、子音に関して、「/r/ のすべての調音において[つまりそり舌でも隆起でも]、舌の両側は小白歯と大白歯とに接触していて、それは /n/ あるいは /d/ の場合と同様である」(116)<sup>9)</sup> と述べていることである(この点については後述)。

一方 Jones (1956<sup>4</sup>, 48-49) では、米音の /ɹ/ を *r* 音色付与された [ə] であると一応述べた上で、「この '*r* 音色付与' は、舌尖を後方にそらせる retroflexion(あるいは inversion)によってか、あるいは

舌の両側を収縮させ、舌全体を後ろに引く[収縮させる]ことによって成される……。この反転は母音の調音と同時に起こる」<sup>10)</sup>と説明する。更に、このそり舌音を表記する場合、簡単には[ɹ]だけでよいとし、その例として、[tə'gɛðɹ] (*together*), ['ouɹɪ] (*over*) 等をあげている。

又、Jones (1960<sup>9</sup>, 358) においても同様の記述を繰り返しているが、この米音について、「この米音において普通の[ɹ]は、私には[ɹ̥]に近い'r音色付与された'高母音の様に思われる」<sup>11)</sup>とも指摘している。このことは、間接的ではあるがBronsteinが指摘している、舌の両側が上臼歯と接触している事実を示しているものと思われる。

同様にGimson (1980<sup>3</sup>, 124) も、この米音を[ər]又は[ə̃]としてr音色付与された母音とみているが、*bird* に対して[bɪd]という表記も紹介し、そり舌の調音と共にもう一つの調音方法にも言及している。又、英音の子音の[ɹ]に関する記述(205-206)の所ではあるが(そして、この場合の[ɹ]は英米で大差はないと考えられるが)、「舌の後部の周縁は上の大臼歯に接触している」<sup>12)</sup>と述べている。更に、外国人学習者への助言の項(209-210)では、「RP[英国容認発音]の[ɹ]にアプローチする時は、その音が母音であるかのようになさい」<sup>13)</sup>とも付け加えている。

柘矢(1976, 169; 171~174)は、この音を「硬口蓋そり舌中央接近音」と「硬口蓋後部中央接近音」の二異音とに分けて詳述しているが、この場合の前者がいわゆるそり舌音、後者が隆起音である。<sup>14)</sup> 前者については、「舌尖が硬口蓋前部に向かって持ち上げられ、そり舌を作る……。舌体は大きく後ろに引かれ、前舌面がイギリス英語の[r]に見られるようにさじ状になることはない。その他の点では、イギリス英語の[r]と大差ない。中には舌尖を後ろに曲げて非常に強いそり舌を作る人もある」(169)と述べ、後者については、Uldall (1958)<sup>15)</sup>から訳出引用して、「舌が前後方向に縮められて、上の大臼歯に向ってもり上がり、左右の側縁はやや強く大臼歯に押付けられる。この時、舌尖は舌体の方に引込まれ、舌背は外に向ってほぼ垂直な面を作る…」(172)としている。Uldallはこの調音方法のものを「大臼歯の'r」(molar 'r')と呼んでいる。

更に柘矢は、この米音は、[r]が音節副音、[ɹ, ə̃]が音節主音であり、調音上は同種と考えて差支えないので、[ɹ, ə̃]=[ɹ̥]であって、音素としても単一の/r/を設定する可能性もあるとしているが、母国語話者の認識がどうであるかが不明であるとして、便宜上三者を書き分けている。

Bowen (1975, 52)は子音/r/としてこの音を分類し、母音のものは/a/にそり舌が加えられたもの、と考えているが、「実際のこの/r/は非常に母音に似ている」<sup>16)</sup>と述べると共に、例えば*fur*という語の音節主音を/r/と表記して、主音性を示すこともできるとしているが、この点は柘矢と同様である。

中野(1973, 46)もこの点に言及して、「これらの母子両音はいずれも共鳴音の要素が圧倒的に多いから、母音性を多分に保ちながら、機能的には子音性をも含んでいる」と述べている。

又、Catford (1977)は、しばしば*retroflex*と呼ばれる調音は、「一方ではある種の舌尖・硬口蓋後部調音に対して、又他方では舌尖が幾分持ち上がり、実際には反転することなく、舌体へ後向きに引込まれる(有声)母音の調音に対して、きわめて不正確に(quite loosely)に用いられがちである」(150)<sup>17)</sup>と問題を提起した後で、次の様に詳述している。

一例は典型的の中西部米音の子音/r/あるいは*bird*におけるような母音である。この音はしばしば不正確に「そり舌[反転]音」と名付けられているが、実際はきわめてしばしば「舌尖が収縮した[後ろに引かれた], 軟口蓋前方(化)漸近音」(apex-retracted, advanced velar approximant)であって、「舌尖後方歯茎化, 軟口蓋前方(化)[前進軟口蓋(化)]漸近音」(apico-postalveolarized, advanced velar approximant)と記述されよう。(150)<sup>18)</sup>

Catford の記述は、調音音声学的にはこれ以上簡潔にはできない形で米音のそり舌音を規定したものとさえいえるが、これによって、いわゆる そり舌性(retroflexion)と隆起性(bunching)が同時に記述されたことになっている。しかし、この場合、重点はむしろ bunching に該当する性質にあって、他の所(181-182)でも指摘されている様に、「舌尖が実際にそり返ることはない」(without there being any actual retroflex 'pointing' of the tongue) のである。一般に「そり返る[反転する]」と言われているのは、実際には(程度の差はもちろんあるが)舌尖が後に収縮して舌体に引込まれ、舌体もまた後方に収縮する、ということのようである。

又、上のことに関連して、口腔内の狭め(constriction)に注目した記述をしているのは、Daniloff (1973), Ladefoged (1982<sup>2</sup>), それに Lindau (1985) 等である。Daniloff は[r]の調音に際して「舌背と舌尖は普通には上昇し、その為二つの地点に狭めがあり、一つは舌背と軟口蓋との間、もう一つはそり舌で上方へ反転した舌尖と歯茎との間である…。[ただし]これらの狭めは、摩擦的の音を起こす程強いものではない」(191)<sup>19</sup>と述べている。

又、Ladefoged は、米音の[ɜ, ə](彼の表記ではいずれも[ə])という母音を説明するのに 'rhotacization', 'rhotic' という術語を用いているが、これは概ね(聴覚的な)r音色付与の概念に相当するものである。そして、「最近の X 線による研究は、r 音色付与特性を生じさせるこれらの調音法[前述の二つの調音法]においては、普通舌が喉頭蓋下部に後方収縮することによって生じる狭めが咽頭部にある、という事実を示してきている」(78)<sup>20</sup>と述べている。

一方 Lindau は、9名の米音話者を被験者にして、'Say herd again' というフレーム文で発音されたデータから[i]の部分を取り出し、スペクトログラムと X 線トレースによる分析をした結果、「この米音の隆起の r 音には、咽頭下部と硬口蓋の所に狭めがある。……米語の他の話者[9名中3名を指す]は /r/ に関して多かれ少なかれそり舌調音(に当たるもの)を用いているが、この場合も唇唇とだけではなく、咽頭下部における狭めとも組み合わせられている」(163)<sup>21</sup>と述べている。Lindau の掲げている X 線トレース図は bunched のものだけであるが、これによれば多少の個人差は認められるが、硬口蓋の後部あるいは軟口蓋の前部(口蓋上で歯先から口蓋帆までの距離で言えば、ほぼ中央かやや後方より)に確かに狭めが認められる。そして、これは Catford の記述、定義とほぼ合致する。又、Lindau の言う咽頭下部の狭めというのが、その図でどのあたりを指すのか必ずしも明確ではないが、後部咽頭壁と後舌(back of tongue)あるいは舌根(root of tongue)との間にも狭めらしきものは認められるし、Ladefoged の言う、喉頭蓋下部へ舌が収縮して引かれている様に見えるものもある。

以上の種々の記述を通して浮かび上がってくる幾つかの点がある。その第一は、米音のいわゆるそり舌音の調音では、舌体が盛り上がり、同時に後方に引かれる[収縮する]ということであり、その為に舌の両側が上の臼歯にかなり強く接触する、という点である。

第二は、確かにこの音には通常二つの調音方法があるとされるが、舌尖が大きく後方に反転するという記述は必ずしも正確ではなく、むしろ Catford などが主張している舌体に引き込まれるように緊張する(ただし、舌体の隆起に伴って舌尖も上昇はする)、という記述の方が事実に近いのではないかと、という点である。

第三には、上記第一点と関係があるが、舌と口蓋(硬口蓋後部あるいは軟口蓋前部)、更には後舌か舌根と後部咽頭壁との間にかかなりの狭めが作られる、という点である。この緊張を伴った舌体の上方と後方への収縮(retraction)ということが、この音の音質に大きく関与しているように思われる。

最後に、第四としては、純音声学的観点から言えば、この音を母・子両音に分けて表記することは正確ではなく、むしろ種々の記述は、調音方法と聴覚印象から言えば母・子両音に分けて [ɜ, ə, ɪ] とすることの前提として、同一音声を想定していることを窺わせる。従って、同一音声として表記す

る可能性と必然性もきわめて大きい、という点である。

### 1. 3. スピーチ・エラーからみた分類

Stemberger (1983) は、言い誤りのデータから /r/ と /l/ を分析、分類し、この両者の本質をどう考えたら良いか論じている。そして、以下の様に述べている。

音節主音的 /r/ と母音の前の /r/ [つまり [ɹ, ʁ] と [ɹ̥]] は単一音素の構成員でなければならない。(145)<sup>22)</sup>

…音節主音的 /r/ と /l/ は母音ではなく、実は子音の /r/ と /l/ と同じ単位の子音がたまたま音節主音的になったものである。…/r/ が音節主音の位置を充たすことがゆるされる単位であるから、母音の前と母音の後の /r/ が、ある程度母音と影響し合えるのである。(146)<sup>23)</sup>

これらの言い誤りは、単音[それ自体]には[±成節性]という様な素性は含まれない、ということを示している…。音節主音的 /r/ と母音の前の /r/ は、明らかに厳密には、音素 /r/ という同一単位なのである。(146)<sup>24)</sup>

以上のことは、前節で触れた母国語話者の言語意識(cf. 柗矢 169)ということに対して、正常時のものではないとしても、ある種の解答を与えている様に思われる。つまり、[ɹ, ʁ, ʁ̥] と分けて扱われている音は、実際は子音音素 /r/ である、という可能性である。そして、この事は 1. 1. で略述した歴史的変遷とも良く符合する見方である。

### 1. 4. (筋)運動感覚的内省とパラトグラム

「(筋)運動感覚的内省あるいはフィードバック」(kinaesthetic introspection[feedback])を強調するのは Catford (1977) であるが、彼によると、その意味していることは「自分自身の音声の運動的局面[つまり、ある音を発する時に調音器官がどういう動きをするかということ]に対する内省的洞察力を伸ばすこと」(the development of introspective insight into the motor aspects of one's own speech)であって、この能力なしには音声理論において十分有能であったり、実験的音声データを適切に利用したりすることは不可能である(Preface, i)、と断言している。この点では、現筆者は余り適格であるとは言えないかもしれないが、以下筆者自身の調音を内省観察した結果を(参考までに)紹介してみようと思う。

#### 1) 母音の前で語頭の場合

例えば、read, all right のような語頭の場合には、慎重で丁寧な(careful)発音では舌尖が持ち上がる感覚が比較的大きい。特に all right の場合では、直前の [+ ] の調音に影響されて歯茎後部あるいは硬口蓋前部に、かなりはっきりと持ち上がっているようである。しかし、何気ない自然な(careless)発音では、いずれの場合も舌の持ち上がる程度は少なく、むしろ舌体の隆起と後方収縮の発音である。又、以上に加えて唇の丸め(円唇)が認められる。

#### 2) 破擦音の場合

たとえば、try, drink などでは、舌尖はそり返らず、歯茎後部で閉鎖を作った [t, d] から、舌体の隆起と後方収縮によって引かれた形で [ɹ] が発せられる。又、同様な聴覚印象は、舌尖をややそり気味にし舌尖の裏面を硬口蓋と歯茎との接点のあたりにつけて、それを歯茎に向かって前

方に弾く様にしても得られる。いずれの場合でも軽い円唇が加わる。

### 3) 音節主音又は二重母音の要素の場合

a) 例えば, *stir, teacher, bear* では隆起後方収縮のいわゆる *bunched* である。舌尖は Catford の言う様に少しだけそのような印象だが、厳密には舌体に引込まれる様な感じで調音されている。円唇が加わる。

b) 例えば, *girl, world* では, *careful* な発音では直後の暗い “l” (dark [ɫ]) が調音上予想されていて、その為舌尖が歯茎後部へそり返る度合いが大きいようである。又, [-ɪd] の場合には [d] が歯茎前方の調音点なので、舌の移動がより大きく、その為そり舌の感じが強い。しかし, *careless* な発音では、舌体が強く後ろに引かれる *bunched* の感じの方が強いようである。又、円唇化される。

### 4) その他の場合

例えば, *perhaps* を [pɪ'hæps] のように発音する場合には常に *bunched* であるが, ['piæps] と発音する場合には、ゆっくり言えば *retroflex* にもなるが、普通の発音では *bunched* である。

又, *represent* の場合, *careful* な発音では語頭の *re-* は *retroflex* に近いが, *-pre-* は *bunched* で発音している。しかし, *careless* な発音ではいずれの場合も *bunched* として発音しているようである。軽い円唇が認められる。

更に, ‘Accordingly some words were read with a different set of vowels’ という発話 (utterance) においては, *careful* な発音では *read* だけが *retroflex* の度合いが大きい様であるが、他はすべて *bunched* になっているようであり, *careless* な発音ではすべての場合に *bunched* が使われているように受け取れる。

次に現筆者の発音する [ɹ] を電子パラトグラムに取ったもので、舌のどの部位が口蓋のどの位置に接触しているかを確認しておこう。位置を比較しやすい様に、図1に上口蓋の歯の位置と名称を掲げておく。これは現筆者自身の口蓋から取った模型をトレースした原寸大のものである。図2は現筆者が [tɹ] と発音した一連のパラトグラムから、最も定状的な1フレームを取ったものである。<sup>25)</sup> 又、図3は解りやすくする為に、図1の口蓋図に図2のパラトグラムを重ねてどの歯に接触があるかを示したものである。

これによると、やはり舌体はかなり緊張して上に隆り上がっていて、舌の両側が第二小白歯 (2nd

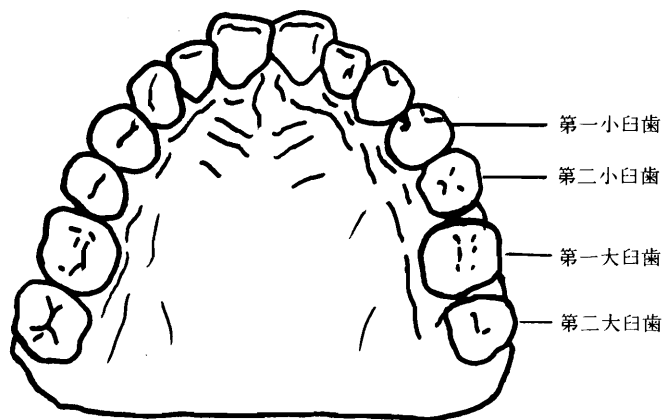


図1 上口蓋



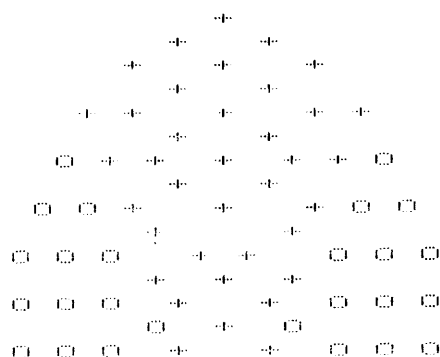


図2 電子パラトグラムによる /ɹ/=[ɹ]

○は舌の接触を表わす

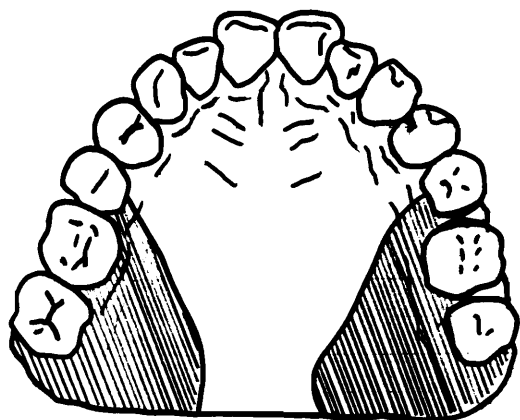


図3 パラトグラム(図2)を図1に重ねたもの

◎が舌の接触している部分を表わす。

bicuspid)あたりから、後ろの臼歯(molars)にかけてかなり広い範囲にわたって接触しているのが解る。このパラトグラムからは舌尖の状態は判断できないが、上述の運動感覚的内省による発音傾向から言っても、舌尖はそり返るというよりはむしろ緊張して上方に隆起した舌体に取り込まれている、と判断できる。<sup>26)</sup>

#### 1. 5. /ɹ/ の本質の記述と分類・表記法

以上の論考を通して言えることは、主として次の二つである。その一は、/ɹ/ そのものの調音方法とその記述に関してであり、その二は、/ɹ/ の分類方法とそれに絡む表記の問題である。

これまでみてきた様に、/ɹ/ の調音方法には一般に二通りある、とされる。そして、両者を区別して舌尖がそり返るものにのみ retroflex という語を用い、他方を bunched とする学者もあるが、多くは両者を retroflex として一括した記述をしている。しかし、Catford も言う様に、これはきわめて不正確な記述と言わざるを得ない。実際、舌尖がそり返るような感覚を与える現象は絶無ではないが、より正しくは、舌体が緊張し両側が収縮して隆り上がり(それによって両側が口蓋に強く接触し)、同時に後にも収縮して引かれる一連の動きに伴って、舌尖も緊張収縮して舌体に引き込まれる(この時確かに舌尖が下歯茎の後の休止の位置から持ち上げられるので、それがそり返る印象を与えているものと思われる)ということであろう。そして、この舌尖と舌体の緊張・収縮作用が特に強い場合(例えば語頭で careful な発音をする場合など)には、円唇作用とも合わさって、舌尖が強くそり返るような印象を与えたり、事実他の場合よりは反転の度合いが強くなったりもするのである。しかし、その場合でも、/ɹ/ 本来の音色を作っているのは舌体の後方収縮と上方隆起に伴う舌の両側の口蓋との接触(又、それによる狭め)、そして、以上に加えての円唇化であり、米音独特の /ɹ/ の響きは、ただ単純に舌尖を持ち上げて反転させるだけでは作られない(これでもある種の響きは作られるが、聴いた印象は緊張感の少ない、ややだらけた様な音になってしまう)。

言い換えれば、

- 1) 舌体の後方収縮、
- 2) 上方隆起に伴う舌の両側の、口蓋との接触、
- 3) それらによる声道の狭め、更には、
- 4) 円唇化、

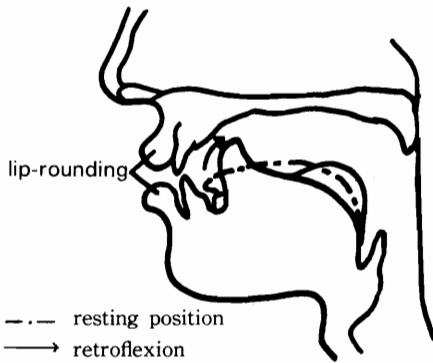


図4 いわゆるそり舌の [ɻ] として示されているもの（舌尖のそり舌のみを示すものと、舌が凹形になるものと両方ある）

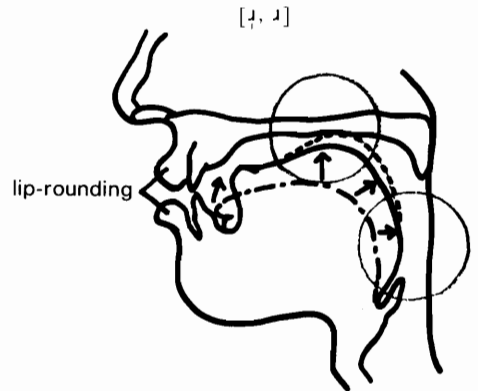


図5 後方収縮の [ɻ, ɻ̠]

—●— resting position  
 --- sides of the tongue  
 → retraction/bunching  
 ○ constriction

は義務的 (obligatory) であるが、舌尖が口蓋にそり返ることは随意的 (optional) である、ということになるであろう。

以上のことをふまえて、/ɻ/ の調音を概略的に図示しようとすれば、一般によく示される図4の様ではなく、図5のようになるであろうと思われる。

次に分類・表記法であるが、これも今までみてきた様に、母・子両音に分けることには純音声学的観点からは何らの蓋然性もない、ということになる。Kenyon も記述している様に、母・子両音とも全く同じ調音方法を取っていて、その場合、聴覚印象は全く同じと考えて良いのであり、歴史的変遷から言っても、スピーチ・エラーの観点から言っても、母・子両音に分けるのは音声学的考慮以外のもの（つまり音韻的考慮）が働いているのである。従って、少なくとも米音においては全く同一の音を、音節主音的に働く場合には母音として [ɻ, ə] と表記し、音節副音的に働く場合には子音として [r] と表記することにも、説明の便宜的効用はあるにしても、何ら音声学的必然性は認められず、むしろ、この音の本質を見失わせたり、数回同じ様な記述をしなければならず、その為に記述を冗長にしたりするだけである。それよりは、/ɻ/ という一つの音素として括り、一度だけ正確に記述、分類し、音声実現体 (phonetic realization) として音節主音の場合を /ɻ/, 音節副音の場合を /ɻ/ とする方が、簡潔 (economical) であり、[ɻ̠] と [ɻ] の関連性をも示すことができ、より本質に適った方法であろうと思われる。

又、この音をそり舌 [反転] 音と呼称することについても付言すれば、先述した様にそり舌性 (retroflexion) というのは、この音に関しては随意的とも言える特性を、誤った（あるいは誇張した）印象に基づいて表現しているのであって正確な呼び方ではない。これまでも、「隆起の r」, 「大臼歯の r」, あるいは「軟口蓋の r」などと呼ばれていて (cf. 柝矢 172), それなりに特徴をつかんだ呼称ではあるが、これらはいずれも retroflex とは区別した調音方法に対して言われているのであって、retroflex を前提とした呼び方であり、先述の Catford の記述 (1. 2. 参照) の様な包括的特性を指してはいない。むしろ、舌体の緊張と後方収縮が舌の両側の口蓋との接触や声道の狭めを作り出していることから言えば、「(後方) 収縮の /ɻ/」(retracted /ɻ/) とでも呼んだ方が実体により即しているの

はないか、と思われる。

## 2. 発音教本等の再検討

前章での議論で /ɹ/ の調音の本質的特徴は解明できたと思うので、本章ではそれに基づいて /ɹ/ の発音指導について検討していきたいと思う。指導・教授が研究自体とは違ったアプローチを必要とすることは確かであるが、正しい指導・教授は、改めて言うまでもなく、正確な分析、記述に基づかなければならない。特に音声指導においてはそうであって、その理論面と教授者自身の運動感覚的内省を通じての正しい発音の把握によって初めて、効果的な指導が実施できるわけである(もちろん、学習者の側の努力・研鑽も大いに必要なことであるのは言うまでもないことである)。

以下、発音教本・指導書等を比較考量していくわけだが、その場合、着目しなければならない点は、それら教本類の発音の説明や指導法が前章で明らかにされた正確な記述を反映し、それに副ってなされているかどうかという点である。

換言すれば、米音のそり舌音を説明・指導する場合、調音方法の二様式に触れることは一応良いとしても、特に問題になるのは舌尖(あるいは舌先)の動きと舌体の形状をどのように扱っているか、ということである。この扱いによって説明の正確・不正確が大きく分かれてくるし、指導の効果も又それによって大きく違ってくるはずである。

### 2. 1. 記述・説明の不適當なもの

以上の観点から、29種類<sup>27)</sup>の英語および日本語で書かれた発音教本ないしは指導書と考えられるものを検討した。そして、その結果圧倒的多数のもの(特に日本語によるもの)に上記説明上の不正確さが認められた。その不正確さの程度にも軽重があるが、以下幾つかのものをあげて論じていくことにする。

…舌尖は硬口蓋に向けて鋭くそり立ち…(…the tip of the tongue is turned up sharply toward the palate…) (Lado/Fries 43)

…舌先はやや後方に曲がって、舌尖のすぐ後ろに空洞のようなものを作る。(the point is turned slightly backwards, forming a hollow space just behind the tip) (Loganbill/Kawashima 136)

…舌尖を上から立ててから後方へそり返す。そうすると舌尖は(口の)内側方向を指している。(… curl the tongue tip up and backwards, so that the tip is pointing inwards.) (Tench 44)

舌の両側と後舌も上昇するので、舌全体は皿の様な形[凹形]になる。(The sides and the back of the tongue are also raised, and so the whole tongue is shaped like a saucer.) (Hooke/Rowell 72)

…舌尖を口腔内の中央あたりに立たせます。…次に、舌尖をこころもち後方にそり気味(retroflexed)にします。…このとき、舌面はちょうど、舟のようにくぼんだ形になっています。(鳥居/兼子 71)

以上の記述で、顕著な似通った表現は、まず舌尖が口腔内で後方にそり返る(又、それによって舌

尖の後が空洞になる)というものと、次に舌の形が中央が凹んで皿や舟(あるいはスプーン状)のようになる、というものである。前者に似通った表現をしている(あるいはその調音法の図を掲げている: 図4参照)ものには、上記の他に、English Language Services (123), Seido Language Institute (22; 33), Clark (57; 76), 中島他 (xvii), 一色/松井 (29), 高本 (87), 五十嵐 (100-101), 松坂/Smith (29), 竹林 (39), Huang (127), 安藤 (24; 58-59), ライトハウス英和 (1681; 1685), 小田/木村 (28; 29; 36-37), ロベルジュ他 (40; 116), Mayer (107), 三宅川/増山 (28), 島岡 (106) などがある。

又、これと多少重なるものもあるが、後者に似て凹みに言及しているものには、上記の他に、Clark (57), 今井 (61), 竹林 (39), Huang (128), 小田/木村 (28), 三宅川/増山 (28) などがある。

又、牧野は、舌の形を示した口腔図を「いくら見ても舌はそり舌にならない」ので、「舌尖を上歯の歯茎や口蓋に絶対つけないようにして、唇を丸め気味にして、モデルの発音をまねて少しでも近い音を出すことである。」(155-156。強調現筆者)と言い、五十嵐はそり舌の口腔図を掲げた後、「なん度か練習している間に、舌の筋肉が慣れてきて、正しい位置に安定させることができるようになる」(100-101。強調現筆者)と励まし、竹林は /æ:/ は日本語にはない独特の母音だから、図を参考にしながら「付属のテープを聞くなどして実際の音を耳から聞いて習得するほかはない。」(39-40。強調現筆者)と逃げ、ライトハウス英和も発音解説の中で「《米》の [æ:] では舌の先を…後ろへそり返らせながら、口をあまり開けずに「アー」と「ウー」の間のようなあいまいな音を発音する。」(1681。強調現筆者)ときわめてあいまいな解説でお茶をにごしているが、これらは、多少とも同情の余地はあるにしても、いずれもあるべき説明法、指導法とは言い難い(ただし、竹林は他の部分と総合判断すれば軽傷である)。モデルやテープ教材は確かに大いに助けにはなっても、上の様な形でそれらに頼るというのは余りにも安易な責任転嫁ではあるまいか。先述の kinaesthetic introspection を用いて自身の発音を観察すれば、上記の様な説明では不十分だということは解ったはずである。<sup>28)</sup>

## 2. 2. 記述・説明が適当なもの

日本語で書かれた教本類の中には、他人の記述・説明を無批判的に採用してしまう為か、不正確なものが目立つ(もちろん、その元になっている英米の教本類にも責任があるのだが)、英語で書かれたものの中には、今回調べた中にも幾つかその説明の適切さが目に留まるものもあった。

まず Scott (1967) は、米音の /r/ は、「舌の筋肉の後方収縮と舌尖がそることに特徴づけられるそり舌共鳴[鳴響]音である」(11) とし、舌尖のそり返りに言及はしているものの、/r/ の発音指導に関しては、「学生にはこの共鳴音の舌尖がそるという特徴は無視させて、その代わりに単に舌の筋肉が後方に収縮することに集中させた方がよい」(12)<sup>29)</sup> と割り切った考えを述べ、その方が日本人にとっては /r-ɪ/ の二音を区別する助けになるだろう、と付け加えているが、卓見であると言わなければならない。

又、Haycraft (1971) は、巻舌[連震]の [r] の発音を防ぐ為に(又、これは日本人がラ行で発音することへの予防にもなる)、ree, rim, rip, run 等を発音する際に、「舌の両側を大臼歯に強く押し付け、この位置から舌を動かさないこと」(106)<sup>30)</sup> という適切な助言を与えている。

さらに、Prator/Robinnett (1972<sup>3)</sup>) は、次の様に述べている。

…英語話者の大多数は、それ[/r/ の音]を舌の両側を口蓋の後部と奥歯とに接触させて発音する。舌尖がどこにも触れないことを銘記するのが大切である。…[/ar/ や /red/ の様な発音において舌の]動きがどの方向で終わるにしても、それは必ず口の奥に向かっての動きによって

始まる。他のいかなる要因よりも、この(後方への)反転[ただし、ここで言われているのは舌体の後方収縮のこと]の動きが、英語の /r/ に典型的な音色を与えているのである。舌尖は少し上昇し後方へ曲がり、一方で舌の両側は二本のレールに沿うように口蓋の後部に沿って[後方へ]滑って行く。(96)<sup>31)</sup>

この記述中、最後の所の、舌の両側が口蓋の後部に沿って後方へ滑って行く、という部分は、/ɹ/ の調音を単独ではなく、他の音との動的な関連で捉えた場合にはきわめて適確な指摘だと解るであろう(例えば、*stir, tray, rude* 等を丁寧に発音して確かめてみると良く解ると思う)。又、舌体が口の奥に向かって動く収縮作用が /ɹ/ の音質の主要因であると指摘しているのは正確な記述であって、本稿第一章の結論ともきわめて良く符合するところである。

### 2. 3. その他

上記いずれのものとも違った方法で、実際の /ɹ/ の発音を示していて、しかも何故か教本類では積極的に援用された形跡のないものがある。それは Gimson と Catford の中にあるもので、両者共に歯茎後方摩擦音の [ʒ] との類似性を利用している。今、Catford の説明をみると、まず無声の [ʃ] から始め、次にそれを有声の [ʒ] にしてから、「きわめてゆっくりと舌尖を後に収縮させ、それと同時に摩擦(気流)が止む丁度の当たりまで口腔の通路を広げる」(152)<sup>32)</sup> ようにすれば、彼のいう「舌尖・歯茎後方漸近音」(apico-postalveolar approximant)の [ɹ] が調音される、というのである。

これは、前章でみた様に、舌の収縮に伴う上昇隆起が舌背と口蓋との間の狭めを作ることが、[ʃ, ʒ] という歯茎後方摩擦音の調音法ときわめて類似していること(ただし、/ɹ/ には摩擦性はない)に着目していて、慧眼と言うべきであろう<sup>33)</sup>。

又、これも前章で絶したが、Jones は米音の /ɹ/ を「r 音色付与された」高母音の [ɛ] に近い音と述べているが、舌体が上昇隆起する共通性をよく擱んでいると言えよう。実際 [ɛ] の代わりに [i:] から初めて、唇を徐々に丸めていくにつれて、舌全体を緊張させて次第に後方に引く(又、それに弱い舌尖のそり気味の緊張を加えても良い)様にしても /ɹ/ の音質は得られるのである<sup>34)</sup>。

### 3. おわりに

以上を要するに、本稿では米音のいわゆる「そり舌[反転]音」の本質とその記述法、更にはそれに基づく発音指導はいかになされるべきであるか、という二点を論じてきた。

第一の点に関しては、第一章の末尾にまとめておいた様に、四つの義務的要素を考えなければならない。つまり、1) 舌体の後方収縮、2) 舌体の上昇隆起に伴う舌の両側の口蓋(詳しくは、第二小臼歯から後の大臼歯にかけて)との接触、3) それによる声道(特に硬口蓋後部ないし軟口蓋前部における)の狭め、それに4) 円唇化、の四要素である。一般によく指摘される舌尖の反転という要素は、ある場合にはこの音とその音質を特徴付けてはいるが、要素としては随意的なものである。従って、「そり舌音」という術語も不正確であり、むしろ「隆起音」(bunched sound)と呼ぶ方が正しいが、舌の隆起も舌筋肉の収縮に基づいているので、より正確には「収縮音」(retracted sound)と呼ぶ方が良いかもしれないのである。

又、米音においては、一般に /r, ʒ, ʌ/ (あるいはそれに類する表記)の様に区別して考えられているこの音は、実は音韻的考慮を除外して考えれば、音声的には全く同じ調音方法で作られる音と見做

されるのであって、歴史的に言っても、言い誤りの分析から言っても、同一音素 /ɪ/ として一括することのできる(又、その方が整合性のある)音であって、それが実現体としては音節主音的 [ɪ] と音節副音的 [ɪ] として現れる、と考えた方が良いのである。

第二の点に関しては、多くの教本類が、この音を記述・説明する際、舌尖のそり返りと舌の形状が凹形になることを強調していることの不備を指摘したが、このことは特に日本人の著した教本類に顕著であって、それに基づいて生徒や教員志望学生が指導されていることを考えれば、きわめて問題のある事柄である。

この音自体がその調音法にある程度の幅のあること、及び口腔の形状に個人差のあることを認めるとしても、発音指導をする教師としては、Catford の言う(筋)運動感覚的内省・フィードバックを常に研くように心がけ、それによって教本・指導書等の不備、不正確を自ら補って正確な調音方法を身につけると共に、学習者の口腔の形状や舌の動きに対する kinaesthetic introspection 能力を研ぎ、それを利用していくような指導及び指導法が強く望まれるのである。正に、Kenyon が引用している Sampson の言葉通り、「音声学の訓練のない言語の教師は、解剖学の訓練のない医師と同様無益である」<sup>35)</sup> と言い得るのである。(了)

#### 註

- 1) 以下、本文中や引用文中では、区別の必要や誤解の恐れのない所では、原則的に、元の文献による表記をそのまま用いる。従って、/r/ や [r] も必要以外には /ɹ/ や [ɹ, ɹ] とはしない。ただし、この表記自体が問題であったり、現筆者の主張を述べる所はこの限りではない。
- 2) "...it refers to a sound made when the TIP of the TONGUE is curled back in the direction of the front part of the hard PALATE—in other words, just behind the ALVEOLAR ridge."
- 3) 竹林 (1982, 39) は、この音が母音として用いられていて、そり舌母音と区別する場合には、収縮母音 (contracted vowel) と呼ぶ。
- 4) "... the body of the tongue is held high and tense during the production of a sound,..."
- 5) "... the vowel position from which (in the author's speech) the tongue movement starts is that of the vowel in *hurt* ɰɹt—a simple vowel with the tongue point turned toward the hard palate, or retroflexed. ...The degree of retroflexion varies; in some cases the tongue for *r* is merely raised toward the teethridge; in others it is merely retracted and laterally contracted; but the acoustic effect is strikingly similar. If the tongue be fixed in the starting position for the *r* in *rate* and voice uttered, the vowel ɰ in *hurt* ɰɹt is made."
- 6) "In the author's speech its sound is identical with the whole word *err*. The point of the tongue is raised from the front of the mouth and curled more or less backward toward the roof of the mouth, without actual contact of the point. During the utterance of the vowel ɰ the tongue is held fixed in the same position that it takes momentarily in the beginning of the consonant *r* in *rate*. This produces the "inverted," or "retroflex" vowel. Other types occur in GA, in which the retroflexion is slight, or replaced by raising and retraction of the tongue, but in which the vowel is still "r-colored," giving the impression of *r* sound."
- 7) "This is the GA unstressed retroflex or *r*-colored vowel, represented by the letters *er* in *better* bɛtə, *perceive* pə'si:v. It corresponds to the stressed retroflex vowel ɰ, having similar tongue position, but shorter and laxer."
- 8) ただし、彼の掲げている口腔図 (114) を見ると、そり舌はそれ程顕著ではない。
- 9) "In all formation of /r/, the sides of the tongue are in contact with the bicuspid and molar teeth, as for /n/ or /d/."
- 10) "The 'r-colouring' is effected either by 'retroflexion' (also called 'inversion') which means curling backwards the tip of the tongue, or by contracting the tongue laterally and retracting the whole body of the tongue ... This retroflexion takes place simultaneously with the vowel articulation."
- 11) "The usual American ɹ appears to me to be an 'r-coloured' high vowel near to *ɛ*"

- 12) "The back rims of the tongue are touching the upper molars"
  - 13) "[A]pproach the RP [ɹ] as if it were a vowel."
  - 14) 栞矢がそり舌音として掲げている図(167)では、舌尖だけではなく舌端が硬口蓋に向かって垂直に立ち、舌尖は少しく後方に向いている。
  - 15) Elizabeth T. Uldall. 'American "molar" r and "flapped" t.' *Revista do Laboratório de Fonética Experimental da Faculdade de Letras da Universidade de Coimbra* 4, 1958, 103-106.
  - 16) "Actually the /r/ is very much like a vowel"
  - 17) "...this term tends to be quite loosely used, on the one hand for certain apico-postalveolar articulations, and on the other vowel (voiced) articulations in which the tongue point is somewhat lifted and drawn back into the body of the tongue without actually being retroflexed."
  - 18) "an example is a typical Mid-Western American /r/ consonant or vowel as in *bird*. This is often loosely termed 'retroflex.' In reality it is most frequently an 'apex-retracted, advanced velar approximant', which may be described as an 'apico-postalveolarized, advanced velar approximant'."
  - 19) "...the tongue dorsum and the tongue tip are usually elevated so that there are two points of constriction, one between tongue dorsum and soft palate, another between the retroflexed, upward curled tip and the alveolar ridge.... The constrictions are not tight enough to cause friction-type noise."
  - 20) "Recent X-ray studies of speech have shown that in both these ways of producing a rhotacized quality there is usually a constriction in the pharynx caused by retraction of the part of the tongue below the epiglottis."
  - 21) "This American English bunched r-sound has constrictions in both the low pharynx and at the palate.... Other speakers of American English use a more or less retroflex articulation for /r/, which is also combined with a constriction in the lower pharynx, as well as liprounding...."
  - 22) "Syllabic /r/ and postvocalic /r/ must be members of a single phoneme"
  - 23) "...syllabic /r/ and /l/ are not vowels, but are in fact consonants that happen to be syllabic, the same units as consonantal /r/ and /l/.... Since /r/ is a unit which is allowed to fill a syllabic position, prevocalic and post-vocalic /r/ can interact with vowels to some extent."
  - 24) "These errors imply that segments do not contain a feature such as [ $\pm$  syllabic],.... A syllabic /r/ and prevocalic /r/ are apparently precisely the same unit, the phoneme /r/."
  - 25) 1986年6月に上智大学音声学研究室(菅原勉教授)の好意により実験採取したものである。
  - 26) W. R. Zemlin(1981). *Speech and Hearing Science: Anatomy and Physiology*. 2nd ed. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc. の364頁、図4-107に掲げられているパラトグラムも、Jones(1960<sup>9</sup>, 196)の図106に掲げられているパラトグラムも、接触の度合は多少ことなるが、第2小臼歯以降大臼歯にかけての舌の接触を示している。
  - 27) それぞれ、著者名と出版年をあげておく以下に如し。(詳しくは文献表参照。)
- [英 語]
- Lado/Fries (1954), English Language Services (1966), Scott (1967), Haycraft (1971), Prator/Robinett (1972<sup>3</sup>), Loganbill/Kawashima (1974), Seido Language Institute (1974), Tench (1981), Hooke/Rowell (1982), Huang (1983<sup>3</sup>), Roach (1983), Mayer (1985<sup>7</sup>).
- [日本語]
- 鳥居/兼子 (1969), クラーク (1972), 中島他 (1974), 牧野 (1977), 一色/松井 (1978), 高木 (1978), 今井 (1980), 五十嵐 (1981), 松坂/スミス (1981), 竹林 (1982), 安藤 (1984), 小田/木村 (1984), ライトハウス英和 (1984), ロベルジュ他 (1985), 島岡 (1986), 藤井 (1986), 三宅川/増山 (1986).
- 28) 尚、煩雑になるので本文では言及しなかったが、竹林 (1982) の議論(「[ɑ:] と /r/ つまり [ɛ] の違いは、[ɑ:] は呼気の続く限りいつまでも継続できる完全な母音であるのに対して、[ɛ] は母音の前ではそれ自身の持続部がごく短く、急速に次の母音へと以降する半母音であること、また母音間では先行の母音からいったん [ɑ:] の位置へ移り、更にまた急速に次の母音へと移行することにある。」(101)) は、一応現象は正しく捉えてはいるが、二つを区別する理由としては弱く、やはり音韻的考慮と言わざるを得ない。せっかく直前の所で「…まず第一に /r/ は音声学的には米音における *err* の母音つまり [ɑ:] と同じ性質であることを認識する必要がある。」(101) と述べたことを自ら帳消しにしてしまっている。
  - 29) "[H]ave the student disregard the tongue-tip curling feature of the English resonant and concentrate instead on a simple muscular retraction of the tongue."
  - 30) "Press the sides of your tongue against the molars, saying 'ree, rim rip, run', without moving

the tongue away from this position.”

- 31) “A large majority of English-speaking people,..., pronounce it with both sides of the tongue touching the back part of the tooth ridge and the back teeth. *It is important to note that the tongue tip does not touch anything;.... In whatever direction the movement may end, it always begins by a motion toward the back of the mouth.* More than any other factor, it is this retroflex (toward the back) motion that gives the English /r/ its typical sound. The tongue tip rises a little and is curved backward, while the sides of the tongue slide along the back part of the tooth ridge as along two rails.”
- 32) “...very slightly retract the tongue-point, widening the articulatory channel just to the point where turbulence ceases.”
- 33) Jones (1960<sup>9</sup>) の191頁の [ʃ] のパラトグラムと、196頁の [ɹ] のパラトグラムを比較すると、接触の程度には差があるが、どちらの場合にも第二小臼歯のあたり以降に舌両側の接触があることがわかる。
- 34) Jones (1960<sup>9</sup>), 65頁の [i:] , 67頁の [ɪ] (= [ɛ]) のパラトグラムを、196頁の [ɹ] のパラトグラムと比べてみても、舌の接触に関しては類似性が認められる。又、小田／木村 (28-29) にも [i:] から発音を始める類似の方法が紹介されている。又、今夏、英語に接する機会のほとんどない、離島に住む小学校六年の甥に、舌全体を緊張させて口蓋に両側を付け、更に後方に引きながら唇を丸くして、/ɹ/ の音の発音をさせてみたが、瞬時にそれらしい響きを出すことができた。更に [i:] から初めて、舌尖に弱いそり気味の緊張を加えて発音させたが、それでもすぐに同様の効果が得られた。調音法に関して全く知識がなくても、適切に指示を与えられることによって発音することができるようになる事を示して示唆的である。
- 35) “A teacher of speech untrained in phonetics is as useless as a doctor untrained in anatomy.” (George Sampson)—Kenyon (1950<sup>10</sup>, Title page) からの引用。

#### 引 用 文 献

- 安藤賢一. 『演習英語音声学』 東京：成美堂, 1984.
- Bowen, J. D. *Patterns of English Pronunciation*. Mass.: Newbury, 1975.
- Bronstein, A. J. *The Pronunciation of American English*. New York: Appleton, 1960.
- Brunner, K. 『英語発達史』 (松浪有他共訳) 東京：大修館書店, 1973.
- Catford, J. C. *Fundamental Problems in Phonetics*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press, 1977.
- Clark, W. L. 『アメリカ口語教本・入門用 (三訂版)』 東京：研究社出版, 1972.
- Crystal, D. *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. 2nd ed. Oxford: Basil Blackwell, 1985.
- Daniloff, R. G. “Normal Articulation Processes.” *Normal Aspects of Speech, Hearing, and Language*. Ed. F. D. Minifie et al. New Jersey: Prentice-Hall, 1973.
- English Language Services. *Drills and Exercises in English Pronunciation*. New York: Macmillan, 1966.
- 藤井健三. 『現代英語発音の基礎』 東京：研究社出版, 1986.
- Gimson, A. C. *An Introduction to the Pronunciation of English*. 3rd ed. London: Edward Arnold, 1980.
- Haycraft, B. *The Teaching of Pronunciation: A Classroom Guide*. London: Longman, 1971.
- Hooke, R., and J. Rowell. *A Handbook of English Pronunciation*. London: Edward Arnold, 1982.
- Huang, R. *English Pronunciation explained with diagrams*. 3rd ed. Hong Kong: Hong Kong Univ. Pr., 1983.
- 五十嵐新次郎. 『英米発音新講』 (改訂新版) 東京：南雲堂, 1981.
- 一色マサ子・松井千枝. 『英語音声学—日本語との比較による—』 東京：朝日出版社, 1978.
- 今井邦彦. 「音声学の比較」『日英語比較講座, 第一巻音声と形態』 (國廣哲彌編). 東京：大修館書店, 1980.
- Jones, D. *The Pronunciation of English*. 4th revised and enlarged ed. Cambridge: C.U.P., 1956.
- . *An Outline of English Phonetics*. 9th ed. Cambridge: W. Heffer and Sons (Maruzen Company Ltd.: Tokyo), 1960.
- Kenyon, J. S. *American Pronunciation*. 10th ed. Ann Arbor: George Wahr, 1950.
- 高本捨三郎. 『英語の発音とヒアリング』 東京：南雲堂, 1978.
- Ladefoged, P. *A Course in Phonetics*. 2nd ed. New York: Harcourt, 1982.
- Lado, R., and C. C. Fries. *English Pronunciation*. Ann Arbor: Univ. of Michigan Pr., 1954.
- 『ライトハウス英和辞典』 (竹林滋・小島義郎編). 「発音解説」 東京：研究社, 1984.
- Lindau, M. “The Story of /r/.” *Phonetic Linguistics: Essays in Honor of Peter Ladefoged*. Ed. V. A. Fromkin. Orlando: Academic Pr., 1985.
- Loganbill, G. B., and T. Kawashima. *The Bases of Voice, Articulation and Pronunciation*. Tokyo: Sansyusya,



1974.

- 牧野 勤. 『英語の発音—指導と学習—』 東京：東京書籍, 1977.
- 枡矢好弘. 『英語音声学』 東京：こびあん書房, 1976.
- 松坂ヒロシ・R. スミス. 『新英会話教本<英検4級レベル>』 東京：日本英語教育協会, 1981.
- Mayer, L. V. *Fundamentals of Voice & Diction*. 7th ed. Dubuque, Iowa: Wm. C. Brown, 1985.
- 三宅川正・増山節夫. 『英語音声学—理論と実際—』 東京：英宝社, 1986.
- 中島文雄他. 『<テープによる>アメリカ英語の発音教本』 東京：研究社, 1974.
- 中野一雄. 『英語子音論』 東京：学書房出版, 1973.
- 小田幸信・木村和夫. 『英語教育音声学』 京都：あぼろん社, 1984.
- 『音聲學大辞典』(日本音聲學會編). 東京：三修社, 1976.
- Prator, C. H., and B. W. Robinett. *Manual of American English Pronunciation*. 3rd ed. New York: Holt, R. & W., 1972.
- Roach, P. *English Phonetics and Phonology: A practical course*. Cambridge: C.U.P., 1983.
- ロベルジュ, C. 他. 『V T法による英語発音指導教本』 東京：研究社出版, 1985.
- Scott, C. T. *English Pronunciation and Intonation Drills*. 東京：ELEC, 1967.
- Seido Language Institute. *Pronunciation Manual: for Japanese Speakers*. Ashiya, Hyogo: Seido L. I. 1974.
- 島岡 丘. 『教室の英語音声学 Q & A』 東京：研究社出版, 1986.
- Stemberger, J. P. "The nature of /r/ and /l/ in English: evidence from speech errors." *Journal of Phonetics* 11 1983: 139-147.
- 竹林 滋. 『英語音声学入門』 東京：大修館書店, 1982.
- Tench, P. *Pronunciation skills*. London: Macmillan, 1981.
- Thomas, C. K. *An Introduction to the Phonetics of American English*. 2nd ed. New York: The Ronald Pr., 1958.
- 鳥居次好・兼子尚道. 『英語発音の指導』 東京：大修館書店, 1969.

(1986年9月16日 受理)